

## 日の丸亭スコット

新田 由紀子

雨に降り込められた箱根の二日間。木々に滴る緑を眺め飽いて、お昼近くに雨脚が途切れたので宿を出る。折よく、濡れそぼったバスが下ってきた。湯本に直行するなら、お昼は「八イカラ中華日清亭」と決めている。

天下の険の急坂を車体はクリスチャニアで突っ込んで行く。痛む膝をかばいつつ、足を踏ん張り両手をつつ張るが、誰も席を譲ってくれない。なんだ坂こんな坂。舌にとろける中華が待っているのだ。

駅の手前の路地を行くと、登山電車の石垣の下に看板が見えるが、なんだか変だ。席待ちの人がいない。まさかの定休日。勇んで来るといつもこうだ。

それならそれだと、路地奥を覗くとラーメン屋がある。赤いドアはスナック風、軒に日の丸の旗と提灯の妙な店構え。中にはデーんとオヤジさんが座っている。「ママ塩ひげに日の丸の鉢巻き。「ウチ、ラーメン屋ですがいいですか」「ええ、いいですよ」と座ろうとしたら、荷物は空いたテーブルに置けという。「それ、まずいでしょ。そこ客席でしょ」「なんで？店のオヤジが喋って喋っててるんだよ」。はいはい、このオヤジ面倒くさそうだ。さつさと済まそう。「あ、トイレね、そのまま真っ直ぐ行って突き当りね」。店の奥も個室の中も年季の入った洋楽趣味が満載。なるほど、個性の強い店なんだ。

支那竹ラーメンが出来上がる。そこはかたなく洋風で丁寧な仕立て。「ウチね、洋食屋だったのヨ」。たつぷりのメンマの上に白いはんぺんがのって、真ん中に真っ赤な小梅。日の丸仕立てか。「ウチ、日の丸亭って、看板見なかった？」はいはい。「このはんぺん、流行るんじゃない」と聞けば、「なあにこんなのたいしたことないヨ」と。泰然として、洋食屋がラーメン屋に化け切れずシッポが見えても構わず、という風。夜は洋食メニューになって、地元の面白い連中が集うディープスポットになるらしい。

なかなか美味しいラーメンだった。外に出れば、須雲川に降り込む五月雨はしきり。